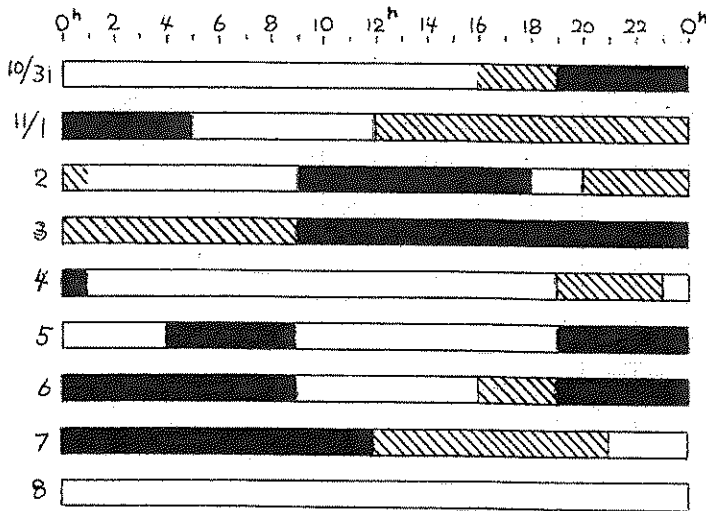
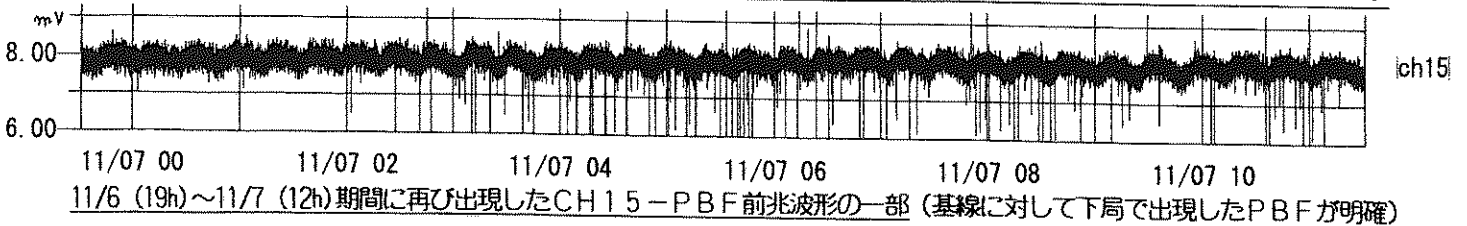


原稿校了後の前兆変化について

八ヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

No.2429, 2430, 2432, 2433続報 CH15-PBF と No.1778 前兆について



CH15-PBF日々出現状況 (スケッチ)

上図凡例

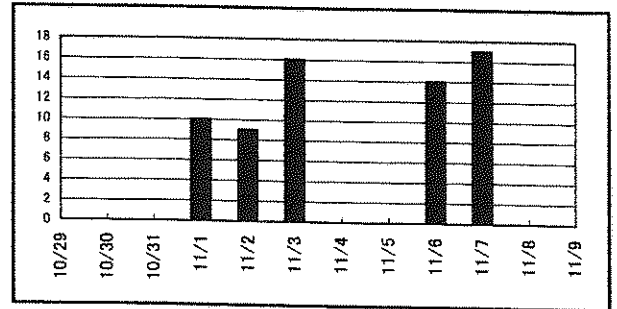
初現=10月31.7日 (31日16時)

PBF出現継続時間計

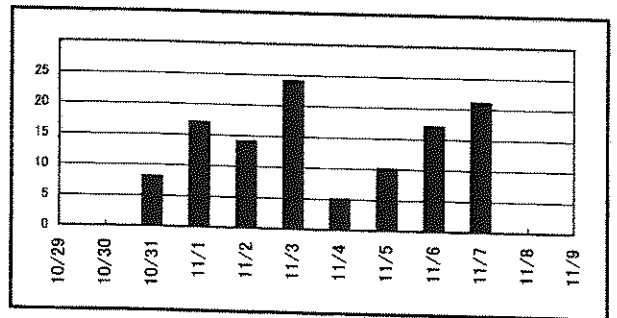
■ 明確なPBF (上図の黒塗+斜線表示部のトータル)

=116時間 →M7.7±相当

▨ 弱いPBF (※微少部分含=120時間強→M7.8±相当)



A) CH15 明確なPBF部継続出現集約表示



B) CH15日々のPBF継続時間計グラフ (弱い部分含)

No.2429, 2430, 2432, 2433 観測情報で報告させて戴きました、八ヶ岳のCH15に突然出現した綺麗なPBF (連続BF) 地震前兆波形についての続報です。

CH15-PBFは、11月06日夕刻~07日の昼まで上波形コピーのとおり明確に出現し、その後弱い状態 (しかしPBFとして見える) で、07日の夜まで継続し、終息致しました。本日11月09日午後現在まで再出現は認められませんので、11月07日夜を最後に終息した可能性があります。

11月06日~07日に出現したCH15-PBF波形は上波形のとおり、明確に基線に対して下側局 (西脇100w又は新居浜100w, 石垣100w) のいずれかの局で出現したPBF前兆です。

前観測情報にも記しましたが、上スケッチ図で黒く示した明確なPBF波形の日々の出現開始又は終息時間帯が、午前9時±及び夕刻18時±に見え、これはNo.1778前兆で出現した基線幅増大BTの日々変化時間帯と一致しており、No.1778の対応地震発生時刻と一致しています。

さらに、右上グラフAのとおり、明確なPBFが継続した日

が、No.1778が11月18~19日±発生と仮定した場合の直前特異の出現推定日と一致していること、今回のCH15-PBFの出現継続時間計がNo.1778前兆から推定される対応地震の推定規模と一致している。これらに加えて、左スケッチのとおり、今回のCH15のPBFの出現形態が、No.1778とは別の大型地震の前兆として集中出現 (山型出現) している様には見にくいこと等々から、今回のCH15-PBFは、No.1778関連前兆として出現した可能性が考えやすいと思われます。

今回のCH15-PBFの前半は、基線に対してどちら側の局で出現しているのか判定が難しい部分がありましたが、半ばから後半は、上波形のとおり、明確に基線に対し下側局で出現していることが確認できたことから、No.1778前兆関連としますと、新居浜100wの可能性として、No.1778の現在の推定領域と調和します。

さて、CH15-PBFは、10月31日夕刻初現として出現し、7日間継続出現して、11月07日夜に終息したと認識されます。上グラフB参照。

次頁続報No.53へ続く

C) Copyright 2013 YSBO八ヶ岳南麓天文台

原稿校了後の前兆変化について

八ヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

No.2429, 2430, 24320, 2433続報 CH15-PBF と No.1778 前兆について

前頁続報No.52からの続き

今回のCH15-PBFは、確かにNo.1778前兆の直前特異出現推定時期に明確なPBF が出現して、他の観測装置の前兆変化と合わせても調和している様に見えます。しかし、前頁のグラフB (日々のCH15-PBF出現継続時間計分) を見ますと、11月03日が極大で、11月07日に再びピークの様な形にも見えます。 — ①

また別に、PBF波形が一番綺麗な長時間出現した、11月07日を極大として、初現10月31.7日とする見方をしてみますと — ②

①の場合は、主極大=11/3 副極大=11/7 として $T_{ps}=4$ 日 $T_{map}:T_{ps}=3.7:1$ 経験則より \Rightarrow 11月17.8日 ± 3

②の場合は、初現=10/31.7 極大=11/07.3 として、 $T_{fap}:T_{map}=20:13$ 経験則より \Rightarrow 11月19.6日 ± 3

と上記の様な見方をすることも完全否定はできません。今回出現したCH15-PBFを直前特異認識しても、別の見方をしても、全て同じ11月19日 ± 2 を示すことは偶然にしても興味深い。

今回のNo.1778前兆は、地殻地震特有の歪み速度の遅い領域での大型地震の特徴である前兆の長期継続に加えて、過去には例の無い、現在までに6段階のステップ的前兆群変化があり、各ステップには複数の極大が出現すると云う、極めて特異な前兆形態であるため、全て推定通りの変化を示すと云う保証もなく、新たに出現した今回のCH15-PBFを前述の様な見方で解析する方法しか思いつきません。

さて、No.1778前兆の第6ステージの前兆変化は下図のとおりですが、殆どの前兆は10月末~11月初旬期間に終息し、単独的に出現した前兆を下図の①~⑨まで、直前特異(過去に出現した極大に対する直前特異 $T_{map}:T_{pa}=6:1$ 経験則)の可能性として見えています。

最終直前特異は⑨の11月07日と認識され、この認識が正しい場合、継続していた関連前兆も11月08日には終息して正常基線に復帰する可能性と見ていました。

しかし、11月09日夕刻現在、CH16とCH21 (CH21は正常基線を記録する時間帯多い)の特異状態が終息しません。これはなぜなのか?

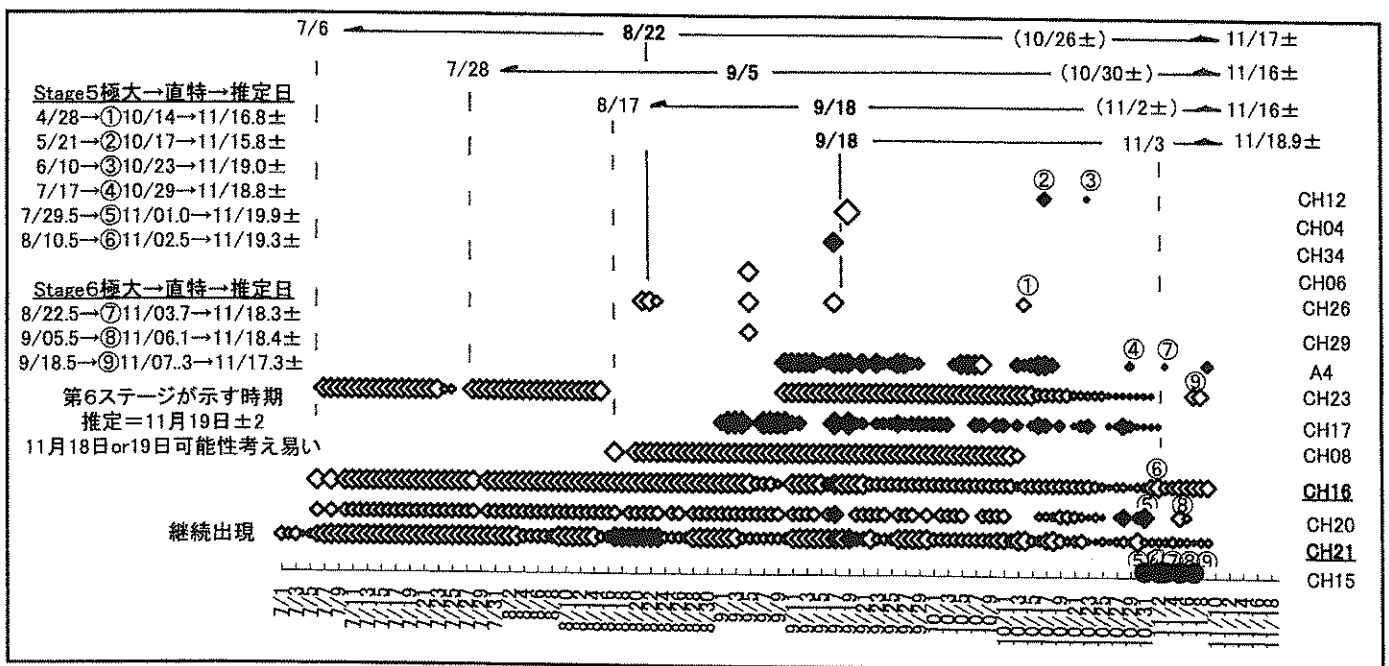
前述した現在までの第6ステージ前兆群の変化の認識理解が正しい仮定した場合、CH16, CH21の前兆が終息しない理由として考えられるのは、ふたつあります。

ひとつは、10月31日~11月07日間に出現観測されたCH15の連続PBF (PBF) 極大に対して終息時期まで継続出現する可能性。この場合には、11月15日 \pm 又は11月16日 \pm まで継続する可能性が示唆されます (11月19日 \pm 推定仮定の場合)。

もうひとつは、現在示される11月19日 ± 2 時期が対応地震発生日ではなく、さらに第7ステージへ以降する可能性です。

いずれにしても現在の第6ステージが示す時期は11月19日 ± 2 です。本日秋田観測点のA4に再び特異状態出現が観測されました。不明点ばかりで困惑していますが、11月16日頃まで更に観測を続けて、現在の認識理解が正しいのか、否かを確認すると共に、さらに検討を続けて続報したいと考えます。

CH16・CH21の前兆が何故終息せず継続しているか?



※タイトルにNo.2429, 2430...等とありますが、FAX による実験観測情報No.です。HPにはアップしてありません。お許し下さい。